

はじめての保育の経験

子供、夢の持てる温かみのある子供になつてくれたなら……。

保育に対する情熱も再び燃えはじめ、私の生活もどうやら軌道に乗ろうとしています。どの様な方法で保育をしていったら一番良いのだろう。どの様なものから入つて、いつら興味を起させる事が出来るだろう。等としなければならない事はいくらくれあります。これからが本当の保育の世界なのです。どんな荒波が押し寄せてくるのか。でももう大丈夫です。最初の打撃があまりに大きかっただけにこれからはどんな事にも決して負けは致しません。当面の問題に園舎の取りこわしという事が有ります。新しい園舎の建てられるのは何時の事か見通しはない様です。しかし台もブランコも使えなくなつてしまします。屋外遊具が一つもなくなつたら子供達はどうするでしょう。本当に子供のためにあらゆる工夫をしなくてはなりません。

それぞれの幼稚園で働いているお友達、どんなに良い環境におかれても、各々何かの問題に悩んでいます。しかし誰もくじけては居りません。「お互に頑張りましょう。」という事で慰め合つて、慣れないながらも一生懸命仕事に励んでいます。

保育の世界に産声をあげたばかりの私、これから子供達と手を取りあって一步一步進んでまいります。そして幼児教育という尊い仕事に微力ながらも自分の最善を尽していくつもりです。

今、私の組の子供たちの中の一人で、常に私の頭を悩ましている子供を例にとって、私の幼稚園生活第一歩の経験をここに紹介してみます。



T
生

はじめて私の接した幼稚園という社会は世の荒波をよそに何と暖く守られていることでしょう。「社会に出れば学生時代とは違うのだから」とか「いつも緊張して他の人と協調しなければ駄目よ」とか「今迄の様に自分の意志にまかせて自由な行動は出来ないのよ」等と先輩からいろいろ注意されていたのに。幼稚園は精神的には社会の中の温室と言える所だとさえ今の私は思えるのです。私達を良く理解し何でも相談にのつて下さる園長や主任、先輩の先生方の家庭的な雰囲気の中で安心して頼つたり、多少あまえたり出来るのですから。すべての幼稚園が皆この様であるかどうか解りませんが、現在の私は恵まれた環境にあると思っています。しかし反面、身体的にはちつとも

温室ではありません。はちきれそな元気一ぱいの子供達の中にあるときは何も忘れてとびまわっているのですが、帰りの満員電車の中で二本の足が重い体をささえて立っているのをもてあましまいます。その為代る代る足を持ち上げ少しでも足に掛かる重力を減らしてやろう等という足愛護精神は、とうていオフィス等に勤めていては理解出来ないものだと思います。家に帰りやっと手足をのばして人心地にかえってから空白になつたような頭の中で余った精神力のすべてを集中させて今日一日の反省と明日のプランをたてるのです。先だってのよう毎日雨が降り続いた時等、どうしたら子供達に興味のある、しかも意味のある一日が過させることができるだろうかと考え、泣きたくなることもありました。とも角恵まれた環境に居る為に、専ら子供達の事のみに没頭出来る教師としての私を幸福だと考えています。

今、私の組の子供達の中の一人で常に私の頭を悩ましている子供の例をとって、私の幼稚園生活を、ここに紹介してみようと思います。

私は、この幼稚園で最年長組の白組の子供達と共に密接な関係を持つことになりました。この組は全體的に元気が良過ぎる位で、体も大きく、子供らしさのあふれた明朗な組なのですが、その中に目だっていつも一人っきりでいる子供があるのに気がつきました。この組の半分位の子供は、前から幼稚園に来てい

た子供達で残りの半分位は新しく四月から入って来たのですが一般に前から居た子供達は内氣で社会性に乏しい様な傾向があります。しかしこの子供は残留組の中でも特にそれが強く友だちと話をしたのもあまり聞いた事がないし、たまに微笑をもらす事はあっても大声で子供らしく笑った事は無く、もちろんふざけたり悪い事をして叱られる事も全く無いのです。

お絵かきをするのを見ても書きたいという意欲はぜんぜん見られず、いつも同じ決まりきった絵ばかり画くのです。この子供の自由画帳を見て驚いたことには、いつもいつも直径一・五センチ位の赤い丸の下に茎があり葉が二枚出ているお花が二つか三つきちんと並んでいて、土があり空がある絵ばかりです。色のぬり方等力づよく隅々まできちんとぬっていますが、何故この子供には、子供らしい楽しさが無いのだろうと私自身も悲しくなりました。又製作の時等、大勢と一緒に何か仕事をしても、自分の思う様に出来ないといつもシクシクと泣き出してしまいます。

私もはじめのうちには、泣く事により傍の子供に及ぼす影響を考え、ただ迷惑になるからという意味でその子供をなだめてやつたりしました。だいたい、この子供の泣く原因が解らなかつたので、それより他に方法が無かつたのです。が、これは母親が赤ちゃんの泣く原因も解らずにただかわいそうだという気持で懸命になってあやすのに似ていました。

かけ出し教師と子供たち

私はこの子についてもっと良く知りたいと考えてこの子供の前任だった先生やお母さんとお話ししてみました。そしてこの子供が心臓弁膜症だという事を知ったのです。この子供の無気力さ不活潑さは病氣から発して、遂にこの子供の気持にまで影響を及ぼしている様に考えられました。それからこの子供は家庭に於ては幼稚園に居る時と違つて大声で笑つたり時々ふざけたり弟の世話を良くしたりするのを知つて驚きましたがそれと同時にがっかりしました。何故幼稚園に来ると家庭に居る時と変つてしまふのでしよう。自分がお友達と一緒にになって飛んだり走つたり思う様に出来ない事がそれ程精神的に苦痛なのかもしれません。それとも他の人から「お前は病氣だから」等と云われているのではないかしらといろいろ考へてみたりしました。

私もなるべくこの子供と一緒に遊びたいと考えるのですがなかなか新しい先生に馴染まないで、前に担任だった先生の側にいつもくつづいているのです。どんなにやさしく積極的に遊びに入って行こうとしてもついて来てくれず何だか私に対してもよそよそしい態度をします。私はこんな所で新参者の悲しさを味あわなければなりませんでした。私には欠けていて前の先生にある何かがあるのではないかと深く反省してもみました。

ところが或る日、何でもないちょっとしたきっかけでこの変わらぬだかまりが解けて来ました。それは自由遊びの間に私が五人の子供とセスチア遊びをしていた時のことです。私がい

ろいろ身振りをしているとその子供も私の側へやつて来ました。そして樂しそうに、面白い身振りの所は笑つたりしながら見ているのです。私はこの子供がこんなに嬉しそうに笑つているのを初めて見ました。

私の頭からはゼスチア遊びはだんだん抜けて行つてその子供の事だけで一杯になりました。こんな良いきつかけが出来たのだからこの機会に、この子供をもつと樂しそうに生き生きとさせてあげたいと私は急に元気になりました。

その時ゼスチア遊びのすぐ傍で椅子を利用して大々的な汽車ごっこをしていました。客席用として椅子が十六か十七位並んでいます。私達はゼスチアから汽車ごっこに入つて行きました。果してその子供も私の手にしつかりつかまる様にしてついて来ました。そして私の隣の席を取ろうとしてキアアキャア騒いでいるのです。私はあまりこの子供が變つてしまつたので驚くと同時に、何だか背中の辺がぞくぞくする程嬉しくなりました。普通の子供にとっては当然な事なのに「ああ良かった」という気が先ずこみ上げて来ました。きっと私の方がこの子供以上に楽しい嬉しい汽車ごっこをしたのではないかと思うと急におかしくなり一人で笑つてしましました。するとその子供は「先生何笑つてゐる」とけげんな顔をしています。こんな時つくづく可愛い子供だなと思いました。何故今まであれ程へだりがあったのか不思議です。そして保育は、子供と共にする生

活は、理論ではなくてやはり体験を通さなくては得られないものがある、くよくよ考えて、子供を怖がっているよりも、何でもなく一緒に遊んでいるうちに子供の心とのつながりを得る事が出来るのだなと感じました。

私達は車掌さんの「北海道、北海道でございます。お降りの方はお早く願います」という声でキップを渡し汽車から降りました。

そしてお庭の草原（牧場）へ皆で出かけて行きました。

いつの間にか、その子の右手を私の左手の掌に感じながら。

一四十四の武器

子供たちは私が新参者だからと遠慮はしない。

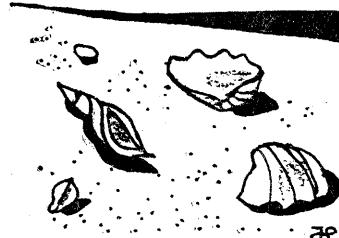
彼等の前にあつては他の先輩と同等に見られ、それ以上に彼等の先生として一番信頼される。四十

四の武器は意外にもその引金は硬かつた……。

K一を抱くと「あーおかしい、あそこに赤ん坊が一人、あーおかしい」と他の子供がからかう。その中の一人を抱くと又残りの連中がはやしたてる。

こうして四十四の武器は各自満足の行く迄はその引金を弛めようとしている。

午後の話合いの時、園長は「貴女達は四十四のすばらしい武器を持っている」と云われた。



Y 生

日曜日の朝の事である。「きのう遊園地に行つたよ。」「あたしはね、お花見に行ったの。」「僕ね、帆柱山に登つた。」と休日の思い出を話合つていると、他組のY男が背中をぽんぽん叩く。と、腕力旺盛な男児数人が「こら、先生を叩いたな」と、握りこぶしを振りながら近寄つて行く。驚いたのはY男である。——皆と一緒に話を聞いてもらおうとしたまでの事だったのに――。

又或時、他組のT子が廊下の隅で泣いていた。理由も聞いただせず、その儘抱え上げて部屋の前を通りかかると、組で一番強いと認められているK一が「ハハーン、おかしいだい、先生に抱っこされて……」と大声をあげながら寄つて来る。部屋で積木をしていた子供達がわあっと集まり、腕にぶらさがりながら、附いて来る。T子を担任の同僚に渡し、さて部屋に帰ろうかと思つ間もなくK一が「ねえ、抱っこしてねえ」とささやく。

K一を抱くと「あーおかしい、あそこに赤ん坊が一人、あーおかしい」と他の子供がからかう。その中の一人を抱くと又残りの連中がはやしたてる。

こうして四十四の武器は各自満足の行く迄はその引金を弛めようとしている。

他組の子供達が近寄つて来れば、あわてて押しのけ、自分がその場に入る。